

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

# 英 文 学 研 究

**STUDIES IN ENGLISH LITERATURE**

*Konan Women's University*

第 四 十 五 号

Volume 45

( 2 0 0 9 年 )

甲南女子大学英文学会  
Konan Women's University English Literature Society

平成21年3月31日 発行  
Issued March 31st, 2009

目 次  
*Contents*

---

『メアリ・バートン』考——労使問題と理想の家庭像

.....越川 菜穂子 .....1

Labor-Management Problems and Ideal Families in *Mary Barton*

..... KOSHIKAWA Naoko

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』（その2）

.....藤本 隆康訳 .....12

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part II

..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

## 『メアリ・バートン』考——労使問題と理想の家庭像

### Labor-Management Problems and Ideal Families in *Mary Barton*

越川 菜穂子

Naoko KOSHIKAWA

#### (一) 労働者と資本家、それぞれの家庭の特徴

エリザベス・ギaskell(Elizabeth Gaskell)の処女作『メアリ・バートン』(*Mary Barton*)には、登場する家庭とその構成員に関して、ギaskellのその後の小説や短編小説にみられる特色がたいてい出そろっている。具体的に列挙すれば、夫婦のいずれかが死亡している片親の家庭、結末における貧しい信仰者の勝利、無信仰な資本家とその家族、美貌を頼みに玉の輿に乗ろうとする娘、美しくはないがやさしい娘、障害者やお針子、孤児になる娘、美貌ゆえに墮落する娘、貧しいが信仰心が篤く周囲の人々を導く男性、妻との死別によって挫折する夫、うぬぼれの強い金持ちの美青年、そして相次ぐ死などである。このような点で『メアリ・バートン』は、その後の作品の傾向を予測させる興味深い小説であり、他の作品を読む際に、上記の諸項目に関するギaskellの採り上げ方を知るためのインデックスの役割を果たしてくれる作品であると言える。本稿では、この作品に登場する資本家の家族と労働者の家族の描写に表れた、労使問題についての作者の見解と、作者が理想とする家族のあり方を探ってみたい。

この作品には、主人公メアリ(Mary)のバートン(Barton)家、ウィルソン(Wilson)家、リー(Legh)家など貧しい労働者の家族と、資本家であるカーソン(Carson)家の様子が描かれている。このうち、労働者の家庭はいくつかの共通点をもって描かれている。その一つは、夫婦に信仰心があり、ことに信仰心の篤い妻が生活面でも精神面でも家族の支えになっているという点である。たとえばジョン・バートン(John Barton)は、妻の生前には福音書の教えに従って生活していたが、妻が亡くなると人が変わったように頑固になり、他人と心を交わすことが少なくなる。組合の活動と聖書の教えを両立させようとしてその矛盾に苦しみ、その結果「墮落」(dropped down 439)してしまう。作者は妻を亡くした時のジョン・バートンの様子を次のように書いている。

One of the good influences over John Barton's life had departed that night. One of the ties which bound him down to the gentle humanities of earth was loosened, and henceforward the neighbours all remarked he was a changed man. His gloom and his sternness became habitual instead of occasional. He was more obstinate. (22)

もしもこの妻が死亡せずジョンに適切な忠告を与えたならば、あるいは少なくともそばにいて彼を支え続けたならば、彼は罪を犯すようなことにはならなかったと思われる。

第二の共通点は、夫か妻のいずれかが死亡して欠けているという点である。ウィルスン家のように夫に先立たれたら家族は経済的にいっそう困窮するし、バートン家のように妻が亡くなってしまうと、子どもの人格形成上マイナスになることがある。夫婦のいずれが先立っても遺された家族には生活面での不便が生じるが、それによって互いに寄り添い、協力し合えるようになることもある。

第三の共通点は、作中の労働者の家族は協力し合って生活しているが、夫は賃金を稼ぐための仕事とは無関係な関心事をもち、そのためにしばしば家計上で不安要因となっている点である。たとえばジョンは組合運動に関心をもち、ジョウブ・リー(Job Legh)は博物学に熱心なため植物や昆虫の採集に興じ、家計をかえりみず高価な標本を買うため、マーガレットの収入が不可欠となっている。

しかし共通点のなかでも最も注目すべきなのは、連帯感が強いことである。売笑婦に身を落としたエスタ(Esther)が、姪のメアリが自分と同じ轍を踏むのを案じて行動するのも、家族愛によるものである。エスタは、メアリの代理母の役割を担っていると言えよう。

メアリは敗北者である父を保護し、打算的で軽率な恋愛の愚かさに気づき、ジェム(Jem)という良き伴侶を得て結婚し母となるが、叔母のエスタや親友のマーガレット(Margaret)、ジェムの母親ジェイン(Jane)やジェムの伯母のアリス(Alice)は、その全過程でメア리를援助する。このうち、エスタ以外はメアリとは血のつながりはないが、いずれも彼女の母親的な役割を果たしている。これらの女性たちに加えて、メアリにはマーガレットの祖父ジョウブ・リーという頼り甲斐のある相談相手がいる。

いっぽう、カースン家に代表される資本家の家庭は様子が違う。経済力のある父親が家族を支配している。経済的に恵まれていて生活の苦勞がないゆえに神をかえりみず、したがって信仰心や心の繊細さも育ちにくい。たとえば娘ソフィー(Sophie)は、作者によれば"too little in the habit of reading expressions on the faces of others"(240)であるために、兄のハリー(Harry)の死の知らせを聞いた女中の驚愕した表情にも気づけない。夫人は専業主婦で、召使がいて家事に手を染めなくてすみ、頭を働かす必要もないために知恵が働かないことを、召使たちから"Wind in the head"(237)と評されている。この家庭では少なくとも、ハリーの死という大事件が起こるまでは、家族で取り組まねばならない問題をかかえることがあまりなかったために、労働者の家族たちほどの心の結びつきもなく、何かが起きた際に一致団結するという雰囲気にもなりにくい。

労働者は心配の種が常にあってお互いを気遣い合い、時には他の者に心配をかけないために悩みを打ち明けず、ひとりで抱え込むというような生活であるからこそ家庭の幸せを実感できるのだとギヤスケルは考えていたようである。そしてこれは、ギヤスケル自身が私生活で実感していることでもあった。ギヤスケルの結婚後数年間の生活について、ジェリン(Winifred Gérin)による伝記に以下のような記述がある。

Elizabeth Gaskell had married a man burdened with a conscience like herself, and she whole-heartedly fell in with whatever voluntary work he took on in addition to his regular duties. In her first years of marriage, she shared in his Sunday School work and evening classes for boys. (Gérin 52)

ギヤスケルは中流階級の妻であったのでむしろカースン家に近い暮らしをしていたが、このように家事の他に夫の教会の仕事があって多忙だったという点では、労働者の妻たちに似ていたと言えよう。

## (二) 人物たちの変化

アレグザンダー・ポープ(Alexander Pope)が"*To err is human, to forgive, divine.*"(Pope 16)と書いているように、人間は過ちや失敗を免れ得ない。ゆえに、『メアリ・バートン』においても登場人物たちが失敗を犯すのは不思議ではないが、ただこの小説の主要人物の過ちはいずれも人生を暗転させるか、あるいはその危険をはらんでいる。

人生を暗転させる危険をはらんだ過ちを犯しそうになる、という点では、まずメアリを挙げなければならない。彼女はハリー・カースンとの交際で過ちを犯しつつあることに気づき、危ういところで難を逃れる。いっぽう彼女の父親ジョンは、労働者のために闘うという目的は誤りではなかったかもしれないが、力を注ぐあまり手段を選ばなかったために殺人罪を犯し、取り返しがつかないことになる。しかも彼は、それによって望ましい結果は何ひとつ得られなかった。死の間際に彼は、周囲から罪の行為を義務であるかのように思わされて罪へと駆り立てられたことに関して申し開きをしたい気持ちになる。そしてジョウブ・リーに"*I did not know what I was doing, Job Legh; God knows I didn't.*"(432)と語り、ジョン・カースン(John Carson)に"*...say you forgive me the anguish I now see I have caused you.*"(432)と述べて許しを乞う。

この謝罪の言葉をかたわらで聞いていたジョウブは"*Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us.*"(432)と言い、怒りを昂ぶらせたジョン・カーソンは"*Let my trespasses be unforgiven, so that I may have vengeance for my son's murder.*"(433)と言い放つ。ギヤスケルはこのカーソンの呪いの言葉を"*blasphemous words*"(433)と述べ、彼が警官を呼んで一刻も早くバートンを刑に処そうとするのを"*blasphemous action*"(433)だと述べている。

この第35章は"**FORGIVE US OUR TRESPASSES**"という題で、「自分が何をしているかわからなかった」という言葉を、ジョン・バートンを皮切りに三人の登場人物が口にすることになる。

その二人目は、ジョン・カーソンがバートンの家からの帰途に出会う見知らぬ少女だ。道ですれ違った少年によってふいに怪我を負わされた少女は、この少年は何をしているのかわからなかったのだからとがめないでくれと乳母に言う。

そして三人目がジョン・カーソンである。彼はバートンと通りすがりの少女の両者から聞いて

た異口同音の言葉が聖書のなかにあることを思い出して急いで帰宅し、殺された息子の誕生記念に買ったまま読まずに放っておいた聖書を開き、このイエスの言葉を探し出す。ジョン・バートンに対し憎悪の念しかもたなかった彼であるが、聖書の言葉を理解することにより、バートンに対する憐れみをも感じ始め、詫びるためにふたたびバートンの家を訪れる。そしてジョウブが言ったと同じ、聖書の言葉"Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us."(438)を言って、死にゆくジョンを胸に抱く。

ジョン・バートンは死に臨んで、それまでの自分の人生についてジョウブ・リーに話す。かつて福音書に従って生活しようとしていた頃、アリス婆さんだけが賛同し応援してくれたが、周囲の者たちはただ労働者の権利獲得のために立ち上がれとあおるだけだった。波にのまれて冷静な判断力を失った彼は、自分よりもさらにひどい生活苦に苦しんでいる人たちを気の毒に思ういっぽうで、その苦しみを引き起こした人たちをも愛さなければという気持の板ばさみになって苦悩し、聖書の教えに従うことをあきらめた。

バートンは貧困に苦しみながらも、組合からの援助金を、自分よりももっと貧しい人たちに与えてくれと言って断り続ける。しかし組合は、組合に有利な働きをしてくれそうな労働者しか援助しようとしなない。本当に援助を必要とする人こそ援助されるべきだと彼は考えているが、これこそが作者が理想とする組合のあり方であろう。

これについてパイク(Elizabeth Holly Pike)は次のように書いている。

The portrayal of the union in *Mary Barton* is of a group of men bound by "fierce terrible oaths" (*Mary Barton* 223) and swayed by a glib and opportunistic union organizer from London. . . . The unionists are shown as forcing everyone to think as they do, though how large a body "they" are is never defined. . . . John Barton's refusal of assistance from the union during hard times so that those who need help more might have it is praiseworthy, therefore, because it is an individual act against the self-serving intentions of the union. Just as Mr. Carson wants to keep his infirmary orders for active workers, not for those ill of fever, the union first offers assistance to "active, useful" (*Mary Barton* 133) members. (Pike 27-28)

このように、作中で描かれている労働組合は、大きなエネルギーとなって動いてはいるが、個々の構成員の幸福が活動の犠牲になり、本末転倒とも言える状態である。このエネルギーは労働者を救うという本来の目的から逸れ、雇用者に対し怒りをぶつけることや組合の存続に力を注ぎ、それが雇用者たちとの溝をさらに深めている。これはのちの短編小説「魔女ロイス」("Lois the Witch")で、主人公を魔女に仕立て上げる町の人たちと同様の群集心理である。

バートンは、かつて組合のことで苦悩した末に聖書の教えに従うのをあきらめ、その時から「墮落してしまった」("I've dropped down" 438)と、死に際に懺悔している。ここに、資本家をただ憎悪する労働組合の運動への、信仰者としてのギヤスケルの批判を読み取ることができる。

作中に何度か出てくる". . . they do not know what they are doing."というのは、イエスが自分を十

十字架にかけた人たちについて言った言葉である (Luke 23:34)。そして"Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us."も同じく聖書中の祈りの言葉(Matthew 6:12)で、この祈りには". . . if you forgive men when they sin against you, your heavenly Father will also forgive you."(Matthew 6:12)という言葉もある。ギヤスケルはこれらの言葉をこの作品のモチーフにしている。自分が何をやっているのかわからないで行った行為により被害を受けても、加害者がそれを深く反省すれば、イエスが自分を十字架にかける者に対して示したのと同じ寛容さで憎しみを棄て、加害者を許せるはずだということをギヤスケルはバートンとカースンの和解の場面で読者に訴えている。

ところで、犯した過ちを自覚するという姿勢をまったくもたないのがハリー・カースンである。この人物だけは他人を憐れんだり共感し合ったりする能力が完全に欠落している。この救いようのない徹底したわがまま者だけは、作者から反省の機会を与えられることなく死ぬ。

### (三) バートンとカースンの和解の場面について

ベンジャミン・ディズレイリ(Benjamin Disraeli)は『シビル、または二つの国民』(*Sybil, or the Two Nations*)のなかで、相容れない労使の関係を「二つの国」("the two nations")と呼んだが、ギヤスケルも『メアリ・バートン』の第1章で、これを「二つの世界」("two worlds" 8)と表現している。マーガレット・ガンツ(Margaret Ganz)の見解によると、ディズレイリは両者間の超え難い溝について注目すべき指摘を行っているが、その指摘は『メアリ・バートン』中のギヤスケルによる指摘には及ばない。なぜなら社会問題に関するディズレイリの論評は政治的なレゾン・デートルをもっているためにその視野や効果が限定されているのに対し、ギヤスケルはゆとりのある人道主義的な考察に基づき、より広い視野から労使問題の解決方法を訴えているためだとしている。さらにガンツは、『シビル、または二つの国民』と『メアリ・バートン』を比較し、次のように述べている。

Whereas Disraeli's knowledge of social conditions was the result of planned research over a limited period of time, Mrs. Gaskell's grasp of the subject was the fruit of many years of personal experience with poverty in her husband's parish. While the mind of the one deftly exposed social ills with thoughtful indignation and a biting contempt for human exploitation, the heart and conscience of the other movingly dramatized the harrowing inequities of man's social condition. (Ganz 50)

これは『メアリ・バートン』の特質についてのまことに的確な要約である。

しかしいっぽうでガンツは、ギヤスケルは同胞愛の美しさとその有効性を劇的に演出するために、ジョン・バートンの死に際におけるジョン・カースンとの和解の場面において、二人

の思想の変化を単純に扱すぎたと批判している。二人の激しい憎しみ合いが双方のヒューマニティの目覚めによって一気に解消するこの場面は、この小説の"the weakest section"(Ganz 75)だということである。

ガンツの批評は、両者の憎しみ合いが激しければそのぶん和解には劇的な効果が伴うので、たいていの読者は熱中して読みすごすだろうが、しかしジョン・バートンの臨終の場面で二人の心理の推移をもっと綿密に描写し、その和解を納得のいくものにしてほしかったという物足りなさを否めないだろうというものである。ガンツは"...we have all of us one human heart."(Ganz 76)という考えを認めさえすれば、政治経済学者たちのもつ精力的な自立の原理を、慈善的な相互依存というキリスト教的な理想に置き換えることができるというギヤスケルの確信に疑問を投じている。そしてギヤスケルが"too perceptive"(Ganz 76)であると述べ、"Thus Mr. Carson is more fully enlightened on his moral duties, yet not through the drama of additional experience as an employer or further psychological conflicts about his personal loss but through a didactic discussion."(Ganz 76)と批評している。これは、登場人物や語り手に作者の思想を語らせる際に、いささか説教じみた内容になりがちなギヤスケル作品についての的確な指摘であると言える。

#### (四)「社会小説」としての結末と「家庭小説」としての結末

この小説では、労働者である父ジョン・バートンの組合活動と娘のメアリの恋愛とが並行して展開する構成になっている。父は悲しい終末を迎えるが、娘はハリー・カーソンとのいわば「何をしているかわからずにいる」恋愛関係から脱皮し、ジェムと結婚する。

有能で真面目な労働者であるジェムは、無実であることが明らかになったにもかかわらず、世間から犯罪者に近いように扱われるため、カナダに移住する。これは理由のない差別感覚や労使問題以前の、働く人たちの仲間意識の改善の必要を読者に感じさせる。この点に関する限りでは、"... it was most desirable to have educated workers, capable of judging..."(457)とするジョン・カーソンの見解は正しいことになる。しかし松岡光治はジェムがマンチェスターを出て行くのは「逃避」で、ひいては作品の続きを描くことからの作者の「逃避」であるとし、以下のように述べている。

作品結末におけるメアリとジェムのカナダへの移住はマンチェスターの苛酷な現実からの逃避、換言すれば後日談による作者自身の語りからの逃避だと批判されても仕方がない。とはいえ、「英国人がお前のような大人しい男をとらえて投獄しちまうような間抜けになってからってもの、この国があまりよく思えなくなった」(459)と言って、息子について行くウィルソン夫人の言葉をギヤスケルの痛烈な英国批判として捉え、彼らの移住を積極的な活動と見なした方が、小説のテーマとは合致するかもしれない。(松岡 55)

引用中、断定は控えられてはいるが、ジェムが理解のある工場長の手配に感謝して移住するのは積極的な「活動」としては理解しがたい。ジェムがマンチェスターに留まって労使問題解決のために何らかのかたちで今後も闘いを続けるという筋書きのほうが、物語の筋書きとしては納得がいく。とは言っても、仮にジェムが英国で労働者としての生活を貫くことになれば、この作品はジェムを主人公とした「社会小説」になってしまい、作者はこの人物の挫折を描かざるを得なくなりそうである。あるいは逆に、ジェムが早くから技術者として努力し能力を身につけていたおかげで、マンチェスターを見限り家族を引き連れて新天地へ向かうことができたという見方をすれば、敗北ではなく積極的な「活動」だということになるだろうが、これも結局は労使問題そのものに向き合うことにはならないため、納得はしがたい。

家族には父親としての思いやりを示しながら労働者たちにはそれを示さない資本家カーソンをギヤスケルは冷酷な人物として批判しているが、労使問題に関するギヤスケルの見解について、ストーンマン(Patsy Stoneman)は以下のように述べている。

“...the middle-class father Carson is 'proud' of his son and daughter for being accomplished, well-dressed and well-mannered (Mary Barton: 107) – features which distinguish them from common humanity. The novel explicitly criticizes Carson for not extending the same sort of paternal care to his workers that they show for one another (e. g. p.458), and modern critics see this 'paternalism' as a weakness in Elizabeth Gaskell's political vision. . . . (Stoneman 72)

現代の批評家たちは契約で成り立つ労使関係において資本家に父権主義による情愛を求めるのは矛盾だと認識したうえで、ギヤスケルがおこなっているカーソン批判を彼女の弱点だとみるのだ、とストーンマンは指摘している。

資本家が家族愛で労働者に接しては、経営は成り立たない。ギヤスケル自身もカーソンを批判しながら自説の甘さに密かに気づいていたために、ジェムを農業機械に関する技術者にして小説を結んだのではないか。技術者は資本家が経営上で必要とする技能を備えているから、資本家はそれに値する待遇をせざるを得ない。したがって、技術者は労使関係から距離を置いた位置にいる。ギヤスケルはジェムをこのような、単純な労働者ではない職業に就かせることによって、労使問題を突き詰めることを回避したと考えることもできよう。

最終章は、ジェムとメアリの結婚でバートン家とウィルソン家が結ばれることによる新しい家族の情景の描写によって終えられている。場所はカナダで、月日もかなり経っている。ジェムとメアリの築く家庭には子どもがいて、ジェインは祖母になっており、併せて五人家族である。さらにギヤスケルは、視力が回復したマーガレットがウィルと結婚し、祖父のジョウブと連れだってカナダのウィルソン家を訪問するという予告で小説を結んでいる。多くの読者は、社会小説というよりも家族愛をテーマにした小説だったという読後感をもつだろう。

ジェムは、ジョン・バートンや父親のジョージ(George)とはちがって、労働組合の活動には

参加しない。メアリは専業主婦となり、夫の収入が安定しているために手内職はしなくてもすむ。召使を雇うほどに豊かではないので、義母であるジェインと協力し合って家事や育児にいそむ。こういう家庭では、全員が家族への帰属感が強い。

このような生活は、カースン家に代表される資本家には見られないものであると同時に、労働者階級の女性たちが羨望する家庭の姿であろう。

メアリの親友で、お針子として賃金を稼いでいたマーガレットは視力を失うが、いわばその代償として神から音楽の才能を与えられ、歌手としてお金を稼ぐようになる。彼女はメアリのよき理解者である。おそらくはそのやさしさを神に認められて視力を取り戻し、ウィル(Will)というよき伴侶に恵まれて結婚する。これも資本家の家庭においては一般的でないかたちの夫婦であろう。

ギヤスケルは「二つの世界」を融和させてこの作品を終えたかったが、それは理想として掲げるにとどまった。しかしそれでも、労使関係や労働者の暮らしを描き、資本家と労働者の双方がキリスト教倫理による秩序ある生活をするように提唱している点で、『メアリ・バートン』は注目すべき作品である。

さて、最終章の直前、第37章の最後にジョン・カースンは、資本家と労働者が金銭上の契約だけでなく、"the ties of respect and affection"(458)によって結ばれることが望ましいと考え、雇用制度の改善に力を尽くしたと書かれているが、それは実現しただろうか。

カースンは復讐を正当化する憎悪の言葉を吐いてバートン家を去る途中、通りすがりの少女の言葉を聞いて聖書を開くことを思い立つ。この偶然がなければ、彼は聖書の内容に心を動かされバートンの死に立ち会うことはなかったはずである。彼はバートンから、貧しくて猩紅熱を患っていたわが子に食べ物を買えずに死なせてしまったという話を聞き、愛児を失った者同士の悲しみを共有し、信仰に目覚めるが、これは特異なケースである。したがって、このような特異な経験をしていない他の経営者たちに彼の新しい経営方針への同意を期待できるとは考えにくい。このためギヤスケルは、ジョン・カースンの目指す改善が、"yet to be carried into execution"(458)という予告に留めざるを得なかった。

ギヤスケルは一種の使命感で労働者の実態を描いてきたが、最終章では労使問題を離れて二組の結婚を読者に報告して作品の結びとした。ゆえにこの第37章のジョン・カースンのその後の取り組みの予告が、労使問題そのものについての結末だと言えるだろう。

バートンとカースンの和解について、大阪教育図書版『メアリ・バートン』の作品解説には以下のように書かれている。

この二人の和解は、貧富の差がもたらす問題、労使関係の問題について何の解決策にもならなかっただろう。しかし、現実をありのままに描こうと目指すギヤスケルにとって、現に進行中のこの混沌とした問題について、個人的に相手を理解し思いやる精神による和解を示すこと以外できななかっただろう。それにこの精神が基底になれば、どんな有効な解決策も生まれるはずはない。そしてこの問題は今もなお解決されてはいないのだ。

(直野 442)

これは、資本主義が成熟した現在の視点に立った整然とした解釈である。ここに指摘されているように、個人間の和解が社会体制の変革にまで発展するということは実際には想像できない。しかし労使間の対立関係の解消を強く望んだギヤスケルは、社会思想家でも経済学者でもなかったため、解決への糸口としては労働者と事業家との相互理解を個人間の和解というプライベートな情景でしか提示できなかった。彼女は願いを込めてバートンとカースンとの和解と、その結果としてのカースンの新しい事業家としての覚醒を描いた。そして最終章では固い社会問題から離れ、安らいだ気分で家庭の幸福を語って小説を結んだのである。

### 引証資料

Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*, New York: Twayne Publishers, Inc., 1969.

Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*, World's Classics, New York: Oxford University Press, 1987.

(テキストからの引用はこの版を用い、頁数を括弧内に記す)

Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography*, Oxford: Oxford University Press, 1976.

Pike, Elizabeth Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*, New York: Peter Lang Publishing Inc., 1995.

Pope, Alexander. *Essay on Criticism*, London: Macmillan and Co., Limited, 1950.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*, Sussex: The Harvester press, 1987.

直野裕子「解説」直野裕子訳『メアリ・バートン』大阪教育図書、2001年。

松岡光治「メアリ・バートン」松岡光治編『ギヤスケルの文学』英宝社、2001年。

編 集 委 員

藤本隆康・Stephen H. Brown

---

平成21年3月31日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会  
神戸市東灘区森北町6丁目2-23  
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム  
TEL (078) 413-3124

編集代表 梅 原 大 輔

---